

VICTOR-MARIE HUGO



LES MISÉRABLES II

SHINCHOSHA

レ・ミゼラブル

Ⅱ

ユ ー ゴ ー
佐 藤 朔 譯

新版世界文學全集

11

新潮社版

新版世界文学全集11

レ・ミゼラブル Ⅱ

昭和三十四年十一月六日 印刷
昭和三十四年十一月十日 発行

定価 参百五拾円

訳者 佐藤 朔

発行者 東京都新宿区矢来町七一
佐藤 義夫

発行所 東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社

電話東京(34)七二一九番
振替東京八〇八番

印刷 二光印刷株式会社
製本 共同製本所

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替いたします。

© Printed in Japan

目次

第二部 コゼット(つづき)

第六篇 プチ・ピクピユス……………二

- 一 ピクピユス小路六十二番地……………二
 - 二 マルタン・ベルガの修道院支部……………三
 - 三 きびしき……………九
 - 四 陽気さ……………一〇
 - 五 気ばらし……………一三
 - 六 小さな修道院……………一七
 - 七 この暗がりの数人の人影……………二〇
 - 八 心のつぎに石……………二二
 - 九 垂れずきんにつつまれた一世紀……………二五
 - 十 永久礼拝の起原……………二八
 - 十一 プチ・ピクピユスの終り……………三〇
- 第七篇 余談……………三〇
- 一 修道院の抽象的観念……………三〇

第八篇 墓地はあたえられたものを

受けとる

- 二 修道院の歴史的事実……………三〇
 - 三 どんな条件なら過去を尊重できるか……………三三
 - 四 原則から見た修道院……………三三
 - 五 祈り……………三三
 - 六 祈りの絶対的な正しさ……………三四
 - 七 非難するときの注意……………三四
 - 八 信仰、法則……………三四
- 一 修道院にはいる方法……………三六
- 二 困難にぶつかつたフォールシユルバン……………三七
- 三 イノサント尼……………三七
- 四 ジャン・バルジャンはアウスチン・カステイレーホーを読んだらしいこと……………三九
- 五 酒飲みでも不死身とはかぎらない……………四〇
- 六 四枚の板のあいだ……………四一
- 七 証明書をなくすな、ということばの起原について……………四二
- 八 口頭試問合格……………四三

九 隱遁生活…………… 六

第三部 マリユス

第一篇 パリの微粒子的研究…………… 五

- 一 小さなもの…………… 五
- 二 そのいくつかの特徴…………… 五
- 三 愉快な奴だ…………… 六
- 四 役に立つかもしれない…………… 六
- 五 その境界…………… 六
- 六 歴史の一端…………… 七
- 七 浮浪児はインドの身分制度のなかにありそうだ…………… 七
- 八 前の王さまがどんなしやれを言ったか…………… 八
- 九 古いゴール魂…………… 九
- 十 「このパリを見よ、この人を見よ」…………… 十
- 十一 嘲笑し、君臨する…………… 十一
- 十二 人民のなかにひそんでいる未来…………… 十二
- 十三 プチ・ガブローシユ…………… 十三

第二篇 大ブルジョワ…………… 二

- 一 九十歳で三十二本の歯…………… 二
- 二 この主人にしてこの邸宅あり…………… 二
- 三 リュック・エスプリ…………… 三
- 四 百歳の熱望者…………… 三
- 五 バスクとニコレット…………… 三
- 六 マニヨンとそのふたりの子供のあらまし…………… 三
- 七 規則——晩でなければ訪問を受けない…………… 三
- 八 ふたりでも一対にならない…………… 三

第三篇 祖父と孫…………… 三

- 一 古いサロン…………… 三
- 二 当時の赤い幽霊のひとり…………… 三
- 三 「かれら、憩わんことを」…………… 三
- 四 強盗の最後…………… 三
- 五 ミサに行く革命家になれる…………… 三
- 六 教会委員に出会った結果…………… 三
- 七 女の尻を追いかける…………… 三
- 八 みかげ石と大理石…………… 三

第四篇 ABCの友……………二四

- 一 歴史的になりそこなつた一団……………二四
- 二 ボッシュエのプロンドー追悼演説……………二五
- 三 マリユスの驚き……………二六
- 四 キャフェ・ミュザンの奥の間……………二七
- 五 地平線はひろがる……………二七
- 六 「生活の苦しさ」……………二七

第五篇 不幸のすぐれた点……………二八

- 一 一文なしのマリユス……………二八
- 二 貧しいマリユス……………二八
- 三 成長したマリユス……………二九
- 四 マブーフ氏……………二九
- 五 貧乏な悲惨のよい隣人……………二九
- 六 かわりの人……………二九

第六篇 二つの星の会合……………三〇

- 一 あだ名、新しい姓のつくられかた……………三〇
- 二 「光ありき」……………三〇

三 春の影響……………三三

- 四 大病のはじまり……………三三
- 五 ブーゴン婆さんがいろいろびっくりすること……………三六
- 六 とらわれの身となる……………三六
- 七 Uという字をめぐる推測……………三六
- 八 老廃兵でさえ幸福になれる……………三六
- 九 雲がくれ……………三六

第七篇 パトロン・ミネット……………三七

- 一 坑道と坑夫……………三七
- 二 どん底……………三七
- 三 バベ、グールメル、クラクズー、モンバルナス……………三九
- 四 仲間の組織……………三九

第八篇 腹黒い貧乏人……………四〇

- 一 マリユスが帽子をかぶつた娘を探しているうちに、鹿帽の男に会う……………四〇
- 二 拾いもの……………四〇

三	「四面の怪物」……………	三六
四	貧困のなかのばら……………	三三
五	神慮ののぞき穴……………	三七
六	巢窟にいる野獸人……………	三九
七	戦術と策略……………	四三
八	あばら屋にさす光……………	四二
九	ジョンドレットが泣きそうになる……………	四七
十	国营馬車の料金は一時間二フラン……………	五一
十一	みじめな者から悲しむ者への申し出……………	五一
十二	ルブラン氏がくれた五フラン貨幣の 使いかた……………	五一
十三	「一対一のさし向かいで、人目をはな れた場所で、かれらは神に祈ることを 考えまい」……………	五一
十四	警官が弁護士にげんこをふたつあたえる こと……………	五一
十五	ジョンドレットが買物をする……………	五一
十六	一八三二年に流行したイギリス調のシ ヤンソンの再登場……………	五一
十七	マリユスがあたえた五フランの使いかた……………	五一

十八	マリユスの二脚の椅子は向かい合わせに なっている……………	五一
十九	暗い奥が気にかかる……………	五一
二十	待ち伏せ……………	五一
二十一	最初にかならず被害者をつかまえて おくべきだ……………	五一
二十二	第三巻で泣いていた子供(本書第二部 第三篇のこと)……………	五一

第四部 ブリュメ通の牧歌とサン・
ドニ通の叙事詩

第一篇	歴史の数ページ……………	五七
一	上手な裁断……………	五七
二	へたな縫いつけ……………	五二
三	ルイ・フィリップ……………	五四
四	土台のひび……………	五〇
五	歴史の成因でありながら歴史の知らな い事実……………	五六
六	アンジョルラスと副官たち……………	五三

第二篇 エポニーヌ……………三〇〇

- 一 ひばりの野……………三〇〇
- 二 犯罪の種は獄中で芽ばえる……………三〇四
- 三 マプーフ老人をおとすれた幽霊……………三〇六
- 四 マリユスをおとすれた幽霊……………三〇一

第三篇 プリュメ通の家……………三〇六

- 一 秘密の家……………三〇六
- 二 国民兵ジャン・バルジャン……………三〇九
- 三 「葉と枝」……………三一一
- 四 鉄柵の変化……………三〇五
- 五 ばらが自ら武器であることを自覚する……………三〇六
- 六 戦いがはじまる……………三〇二
- 七 悲しみに、さらにいやます悲しみを……………三〇五
- 八 徒刑囚の鎖……………三〇七

第四篇 下からの救いは上からの救いに

- なりうる……………三〇六
- 一 外の傷、内の回復……………三〇六

- 二 プリュタルク婆さんはふしぎなできごと
との説明に困らない……………三〇〇

第五篇 その結末がはじめとちがつてい

- ること……………三〇七
- 一 孤独と兵營の結びつき……………三〇七
- 二 コゼットの恐怖……………三〇六
- 三 トゥーサンの説明で恐怖が増す……………三〇二
- 四 石の下の心……………三〇三
- 五 手紙のあとのコゼット……………三〇六
- 六 老人はうまいときに外出するものだ……………三〇六

レ・ミゼラブル
I

第二部

コ

ゼ

ツ

ト

(つぎ)

第六篇 プチ・ピクピユス

一 ピクピユス小路六十二番地

五十年前には、ピクピユス小路六十二番地の正門は、いたって平凡な正門だった。この門は、いつも人を誘いこむように半分ひらいていて、そこから少しも陰気でない二つのもの、つまりぶどうで覆われた塀でとりまかれた中庭と、ぶらぶら歩いている門番の顔とが、見られた。奥の塀の上には、大きな樹木が見えた。太陽の光が中庭を明るく照らし、門番の顔が一杯のぶどう酒で明るくかがやいているとき、このピクピユス小路六十二番地の前を通る人は、愉快な気持にならないではいられなかった。しかしここは、さつきちよつと見たように、陰気な場所だったのである。

入口はほほえんでいたが、家は祈り、泣いていた。

門番のところを通りすぎるのは、容易なことではなく、「ひらけ、胡麻！」を知っていなければならぬから、たいいていの人たちには不可能なことであったが、それでも門番を通りすぎれば、一度にひとりしか通れないくらい、壁のあいだのせまい階段に通じている、右側の小さな玄関にはいり、その階段のチョコレートいろの

羽目板と、カナリやいろの壁をおそれずに、のほって行き、最初の踊り場をすぎて、第二の踊り場をすぎると、二階の廊下に出るのであった。そこまで黄いろい塗りの壁とチョコレートいろの羽目板は、平然と、しかも執拗についできていた。階段と廊下には、二つのりっぱな窓がついていて、廊下は曲って薄暗くなっていた。その角を曲って数歩行くと、ドアに出るが、そのドアがしまっていないので、一層神秘的な感じをあたえた。それを押してなかにはいると、およそ六フィート平方の四角い小さな部屋があった。そこは板石が敷いてあり、よく洗ってあり、きれいで、ひんやりとし、壁には青い花模様の一巻十五スリーのナンキン紙が張ってあった。ほの白い、どんよりした光が、左側の大きな窓からさしこんでいた。その窓は部屋の幅と同じで、小さなガラスがいくつもはまっていた。見回しても、だれもいなかった。耳をすましても足音一つせず、人声もしない。壁はむきだしだし、家具はなにもなく、椅子一つなかった。

もつとよく見ると、ドアとむきあった壁に、約一フィート平方の四角い穴があった。黒い、ごつごつした、丈夫な鉄の棒が縦横にはまっていて、それが格子縞というよりも対角線の、長さ一インチ半ほどの網の目を形づくっていた。壁のナンキン紙の小さな青い花模様は、その鉄格子におとなしくきちんと接していたが、そんな陰気なとりあわせでも、花模様はおじけたり、めんくらったりしなかった。鉄格子の目から出はいりできるくらい、

ごく小さな生きものがいたとしても、鉄格子はそれを許さなかつたであろう。それは物を通さず、目を、つまり精神を通す格子だつた。おそろく、そういうつもりでつくつたのであろう。格子から少しうしろに、一枚のブリキ板が壁にはめこんであり、それには泡すくい穴より、もっと細かい穴が無数にあいていた。ブリキ板の下には、郵便箱の口にそっくりの穴があいていた。呼鈴につないだ紐が、格子のはまつた穴の右側に、ぶらさがつていた。

この紐を動かすと、鈴が鳴つて、びっくりするほどすぐそばで、声が出た。

「どなたですか？」とその声はたずねる。

それは静かな、物悲しいほど静かな女の声であつた。ここでまた魔法のことばを知っていなければならなかつた。それを知らないで、声はだまつてしまい、壁のむこうは墓場の薄気味わるい闇かと思えるほど、ひっそりしてしまふのである。

そのことばを知っていると、声は答える。

「右のほうへおはいりなさい」

右手のほう、窓とむきあつて、天窓のついた灰いろに塗つたガラス戸があつた。掛金をあげて、なかへはいると、まだ格子戸をおろさず、シャンデリヤもついていない、劇場の棧敷席にはいったのと同じ印象を受ける。実際、それは一種の劇場の棧敷で、ガラス戸からほのかな光がさしており、二つの古椅子と、すりきれた一枚のマ

ットがせまいなかにおいてあり、腕の高さの正面には黒い木の板がついていた。この棧敷にも格子がついていたが、ただそれはオペラ座のような金色の木の格子ではなく、にぎりこぶしのような漆喰のかたまりで壁にとりつけてある、おそろしくこみいった奇怪な鉄格子であつた。

少したつて、この穴倉の薄明りに目がなれてきて、格子のむこうをすかして見ようとしても、六インチよりさきは見えなかつた。そこに香料いりパンのように黄いろく塗つた横木で、がんじょうにした黒い板戸の仕切りがあつた。長い薄板をつなぎあわせたもので、その格子の幅だけ全部覆つていた。それはいつもしまつていた。

しばらくすると、その板戸のむこうから、呼びかけてくる声が聞こえた。

「ここにおります。どんなご用ですか？」

それはかわいい声、ときには神々しい声であつた。姿は見えなかつた。呼吸の音さえほとんど聞こえなかつた。墓の仕切りを通して話しかける幽霊かと思われた。

ごく稀なことだが、もし相手の望みになつた人ならば、正面の板戸のせまい薄板がひらいて、幽霊があらわれる。格子のむこう、板戸のむこうに、格子にじやまされながら、一つの顔がほんやりと見える。それも口とあごしか見えない。そのほかは黒いベールで隠れている。それから黒い垂れずきんと、黒い経かたびらにつつまれたような姿がほんやりと見える。その顔が話しかけてく

るのだが、こちらを見もしなければ、決して微笑もしなかつた。

うしろからさしてくる光のかげんで、先方の姿が白く見え、こちらが黒く見えるようになっていた。光線は一つの象徴だつた。

しかし目は、ひらいた窓口から、だれの目からもとざされてゐるその場所を、熱心にのぞきこむ。深いほんやりとしたものが、その黒服の姿をつつんでゐる。目はそのほんやりしたものを求めて、出現したもののまわりのものを見きわめようとする。まもなく、なにも見ていないことに気づく。見ていたものは、闇であり、空間であり、暗黒であり、墓地の空気にまじつた冬の霧であり、ぞつとするような静けさであり、なにも、呼吸の音さえも聞きとれない沈黙であり、幻さえも見えない暗闇なのであつた。

見ていたものは、修道院の内部だつた。

それは、永久礼拝のベルナル派修道女の修道院という、陰気で厳格な教会の内部だつた。いまいるこの部屋は、応接室だつた。はじめに話しかけてくれたあの声は、受付の女の声だつた。彼女は壁のむこうに、四角い穴のそばに、二重の面をかぶつたように、鉄格子と無数に穴のあるブリキ板にまもられて、いつもじつと口もきかずに、すわつてゐた。

格子のついたその部屋が薄暗いのは、俗世間のほうに窓が一つしかなく、修道院の内側には、窓がなかつたか

らである。俗人の目は、その神聖な場所を見てはいけな
いのだ。

しかしその暗黒のむこうには、なにかがあつた。一つの光があつた。この死のなかには、生命があつた。この修道院は、最も世人を避けているが、私がそのなかにはいりこみ、読者にもはいつていただき、まだ物語作者たちが見たこともないし、語つたこともないものを、節度
をまもりながら、語つてみよう。

二 マルタン・ベルガの修道院支部

一八二四年のずつと前から、ピクピュス小路にあつたこの修道院は、マルタン・ベルガの修道院支部であるベルナル派修道女たちの団体であつた。

したがつて、これらベルナル派修道女たちは、ベルナル派修道士たちのように、クレルボーに属してゐるのではなく、ベネディクト派修道士たちのように、シトールに属してゐた。言いかえれば、彼女たちは聖ベルナルではなく、聖ベネディクトに帰依してゐた。

少しでも古文書を読んだことのある人なら、だれでも知つてゐることだが、マルタン・ベルガは、一四二五年にベルナル・ベネディクト修道会(ユイゴ)をつくり、本部をサラマンカに、支部をアルカラにおいた。この修道会は、ヨーロッパのあらゆるカトリック教団に、その

杖葉をひろげていた。

このようにある宗派を他の宗派に結びつけるのは、ローマ教会では、珍しいことではない。いま問題になっている聖ベネディクトの宗派だけをとってみても、それに関係のあるものは、マルタン・ベルガの支部をのぞいても、まだ四つの修道会があった。イタリアにモンテ・カシノと、パドヴァのサンタ・ユスチーナの二つ、フランスにクリュニーとサン・モールの二つ。さらに九つの修道会があった。バロンプロサ、グラモン、セレスタン、カマルデュール、シャルトルー、ユメリエ、オリバトゥール、シルベストラン、シトーなどの会。なぜなら、シトーもそれ自体、他の会の本家でありながら、聖ベネディクトにたいしては、末社にすぎないからである。シトー会は、一〇九八年にラングル教区のモレーム修道院長だった聖ロベールから起こったものである。ところで、スピアコの砂漠から引退した悪魔が（年とっていたので、隠者になったのかもしれない）アポロの古い神殿から、十七歳だった聖ベネディクトに追放されたのは、五二九年のことである。

いつもはだして、胸に柳の枝をまきつけ、決してすわらないというカルメル会修道女の規則について、最も厳格な規則は、マルタン・ベルガのベルナル・ベネディクト会修道女の規則である。彼女たちは垂れずきんつきの、黒い着物を着ているが、聖ベネディクトの特別の規定で、あごのところまでである。広袖のサージの長衣、羊

毛の大きなベール、胸の上で四角に切られ、あごのところまできている垂れずきん、目のところまでさがっているリボン、それが彼女たちの服装である。すべて黒ずくめだが、リボンだけは白い。修練女は同じ服だが、白いものを着ている。誓願修道女はそのほかにロザリオを腰につけている。

マルタン・ベルガのベルナル・ベネディクト会修道女は、サン・サクルマンの女たちと呼ばれるベネディクト会修道女のように、永久礼拝をおこなう。後者は今世紀のはじめに、タンブルに一つ、新サント・ジュヌビエールに通に一つ、パリに二つの教会をもっていた。だがいま話しているプチ・ピクピュスのベルナル・ベネディクト会修道女は、新サント・ジュヌビエール通やタンブルの修道院にはいつているサン・サクルマンの修道女たちとは、まったく別の宗派だった、規則や服装に多くの相違点があった。前者は黒い垂れずきんをつけていた。後者は白いのをつけた上に、縦三インチほどの、めつぎをした銀か銅の聖像を胸につけていた。プチ・ピクピュスの修道女はその聖像をつけていなかった。永久礼拝は、プチ・ピクピュスの教会とタンブルの教会に共通だったが、それでも宗派としてはまったく違っていた。サン・サクルマンの修道女たちとマルタン・ベルガのベネディクト会修道女との類似点は、ただ永久礼拝をおこなうという点だけだった。ちょうどフィリップ・ド・ネリによって、フローレンスに建てられたイタリアのオラトリオ会と、